傾聴

小杉匠

第一部　絶望　『絶望のラプソディー』

宇宙から隕石が降り注ぎ
すべてが木っ端微塵となる
この世界の最期なんて
僕には想像もつかないけど
そんな風に終わるのかな
都市に居並ぶ一群の巨石は
いつの時代にか
世界を破滅に追い込んだ

太陽は西から昇り
地球はどこへ向かうの
決して支離滅裂じゃない
僕等は自然の法則という名の
常識に縛られて何も知らない
その法則を壊しているのは
自分達だというのに

人は誰も、きっと誰も
許し合うことさえ許されず
裏切り、憎しみ、悲しみ、戸惑い
そしてすべてをいつか放り出す
何も知らない無知なままで
人間として生きる総てを放棄して

僕達が生きるこの世界で
誰かの優しさというものを
知っていたかった
味わってみたかった
人は誰の前に跪き
貴方は誰を欺きますか

僕は耳を澄まし、そして聴く
夕空の彼方から流れてくる絶望のラプソディーを

第一部　絶望　『此処』

ここにおいで
ここに愛があるから

ここにおいで
彼はここにいるから

ここにおいで
夢を叶えたいと言っていたじゃないか

ここにおいで
その苦い過去を消し去りたいんだろう

さあ、今ここへ

すべて嘘だ
ここに何があるというのだ
あるのは腐臭に塗れた反吐の固まり

絶望　慟哭　怒声　罵詈雑言

嗚呼　すべての偽りよ
消えてしまえ
遠ざかれ
切り刻まれよ
燃え盛れ

お前たちが本当にここに来るのなら
私が消える
消えて　遠い遠い夜空の星となろう

お前達には見えぬだろうなぁ
もう戻らぬ　ここへは

第一部　絶望　『不要物』

僕は役者だ
自分が存在しない社会を演出してみる
そして　ただの演出のつもりが
何も変わらない日常があることに気付く

この世界のお荷物
そんな風に感じる
そう　ならばいっそ「不要物」と呼んでもらおう
そのほうが気楽というものだ

疲れもあるのだろう
偽りの毎日を送るために
偽りの自分を演じ
日々与えられた時間と心の空白を埋め合わせる

嗚呼　世の中の森羅万象が煌めいていた頃が懐かしい
あの頃　僕は若かった　そして馬鹿だった

生きているフリをして生き続ける自分に
限界を感じ始めたこの頃

目を瞑り
耳を塞ぎ
一切の感情や思考を遮断して
僕は一個の物体となる

それが今の僕のすべて

第一部　絶望　『彷徨』

あてどなく歩を進める夜の街
街の灯は僕の道をほの暗く照らし出す
とても静かだ
僕以外に人っ子一人いない
足許で音がした

グシャリ

靴の裏で粉々に崩れる落ち葉
僕はその脆さに身震いをする

俺はこんなに弱くない
そう心の中で強く叫ぶ

握りしめた拳は
地面に強く突き出したまま
指の骨を折らんばかりに
力を込める

これまで受けてきた数々の辱めを呪い
己の社会的価値はこんなものじゃないと
より一層力を込めるのだ

グシャリ

僕の手指も脚も背も胸も
いつかは脆く朽ち果てるのだろうか

それとも葉が落ちようと屹立する幹や枝のように
立ち続けるのだろうか

第一部　絶望　『呪縛』

時を超え、海を渡り
言葉も文化も違う君に会いにきたよ
あの夏に交わした約束
僕は確かに帰ってくると言った
君は僕との再会を信じた
そんな君を裏切らないさ

君も知ってるだろう
今日僕は凶弾に倒れた
僕は君との約束をたやすく
果たせるものと信じてたのに
僕が命を落とそうと
君は君のままだから
何も変わらなくていいよ
悪いのは社会のせいにして

僕は運命を呪う
何故僕はこの世に生を受けたのか
何に従い日々生きて
何を得るために働き
何が故に苦しむのか
果てはこの仕打ちはないだろう

人間の業とはなんだ
カルマなんて、徳なんて
目一杯積んだところで
一発の銃弾にも
研ぎ澄ませた刃にも
結局敵いやしないじゃないか

ひたむきに自分の中の善を信じ
悪に脅かされ、力に屈し、命を落とす
未来の世界平和など
誰も保証できやしない

僕達は素晴らしい社会を

皆んなで創ってきたつもりだ
この世界の矛盾とこの心の憤慨を
僕は社会に対してぶつける
結局僕達が信じていたより良い社会は
空に吐き出した唾のように自分に返ってくる

第一部　絶望　『心の悲鳴』

僕の心は粉々の硝子細工
両手を離して中空に放り出す
木っ端微塵に砕け散った心の欠片
辺り一面に僕の痛みばかり
僕はひとつずつ丁寧に拾い上げる
僕はどこまでも残酷な嘘つきだ
本当の姿を誰にも隠している
誰かが言うように僕は病んでるのかい
ガラクタなアートとデタラメなオブジェ

今日だけで三度目の地獄行き
無理やり生き永らえている気分
こんな毎日に僕の人生は血塗られる
時間を繰り返せば繰り返すほど
僕が僕でなくなってしまうのはなぜ
そんなにチューニングしてしまったら
僕はありのままの僕でいられない
思考も感情も持たないただのアンドロイド
偽りの生命を繋ぐために我を失う
そんな無意味な毎日を必死で過ごして
僕はいつかきっと餓死してしまう
孤独という名の人生の終着点で

第一部　絶望　『素晴らしき哉、世界』

この世界がこの世界であり続けるように
僕は僕であり続けよう

世界の表面を上滑っている自分を感じるたび
僕はこの世界の不要物だと思う

何故にここで生まれ、ここで育ち、ここに死すのか

この世界と調和しない自分に
どうしようもない苛立ちを覚え
ときに自分の存在意義なんて考えてみる

僕がいなくても世界は回る
いっぽうどうだ
この世界がなくては僕は僕でいられない
だから、僕はこの世界とともに生きるのだ

この世界を愛し、人を愛し、自然を愛し、万物を愛し、
そして僕は無用の長物となる

第二部　希望　『天声』

澄み切った青空の中で
赤子でも優しく抱きしめるかのように
もこもこに膨れ上がった雲

その隙間から
柔らかな光線が
僕の頬を射抜く

そして　心穏やかにあれと
僕に警告するのだ

昨日の幸せに浸りつつ
今日はもっと幸せなお前であれと
僕の心に迫るのだ

明日がお前にある保証なんて
どこにもないのだぞ

取るに足らぬ感情の起伏に支配され
無意味な時間を過ごしてはならぬ

すべての言葉と行動に
生命を吹き込み
全身全霊をかけて
人の世というやつと向き合うのだ

納得した最期を迎えるためにも
今を懸命に生きよ
そうだ　今を生きるのだ

第二部　希望　『キセキ』

澄み切った青空に
僕は奇跡を見た

貴方と出会ったキセキ
すべてが順調すぎるキセキ
今日この場に自分がいるキセキ
この世に自分が産まれてきたキセキ

奇跡はいつも当たり前のよな顔して
僕らの前に現れる

どんな些末なことも
ありえない出来事
そして
当たり前の出来事

僕は芝生に寝転び
あの雲を眺め思う

僕は貴方と出会うべくして会い
来るべくしてここを訪れ
当然のように　この世に生まれ落ちた

すべては筋書きどおり
そうなんでしょう？
お返事は結構です
当たり前な顔しててくれればそれで

第二部　希望　『脱力』

昼下がり
部屋に寝転んで
ぼんやりと物思いに耽る
そんなひとときが好きです

開け放った窓の向こうから
柔らかな陽光と
穏やかな風
それを　この身体に浴びながら
心を空っぽにするのです

何をするでもなく
何を思うでもなく

きっと　どうでもいいことなのです
それが何の為であろうと
自分が一体何者であろうと

私はこの世に生を受け
今日まで　生きてきました
そして　この「今」という時間が
とても愛おしいのです

仰向けになると
澄み切った青空が
私の視界に
飛び込んできました

それで　十分ではないでしょうか

第二部　希望　『夜を愛す』

空が暗転する
夕焼が夜闇に変わる
そんな瞬間が何よりも好きだ

一日が終わりに近付く
新たな一日の始まりが近付く

刻一刻、刻一刻と
漆黒の夜空が
終わりと始まりを連れてくる

騒然とした社会は活動を止め
忽然と、まさに忽然と
整然とした時間と空間に変貌する

僕はその反動を
真正面から受けながら
ただただ夜闇に立ち尽くし
終わりと始まりという反転の瞬間を
見届けんとする

第二部　希望　『春を愛す』

春よ、春よと思っている間に夏が来て
夏か、夏かと思っている間に春が去る
季節の移り変わり
そこに僕はいる

一年を僅か四つに分ける大胆さと乱暴さ
一年は三六五日それぞれであるべき
そんな講釈を垂れながら
なんだかんだ言って僕は
新緑の芽吹く春を愛している

僕は春に小学生になり
春に中学生になり
春に高校生になった
大人への階段はいつも春に用意されていた

この世に生を受けて以来
わずか十数回過ごした春の日々
僕はあと何度この季節を生きられるのだろう
この季節とともに僕はどんな大人になるのだろう

それとも一年を締めくくる冬を愛する
そんな心境の変化があるのかな
この人生を折り返したとき
僕の価値観は揺らぐのだろうか
なにがしかの変化があるのだろうか

そんな由無し事を考えながら
僕は三六五歩のステップを毎日刻んでいく

第二部　希望　『夕映え』

夕陽が何よりも美しい
そう思える人間でいたかった

あの日の夕方
君が僕に放った言葉
僕の硝子細工の心は
粉々に砕け散った

どうして辛いことばかりかなあ
生きていると
どうして夢見てしまうのかなあ
この世の中に

外は雨降りだから
傘を差して歩こうか

夕陽は降り注ぐ雨筋に隠されて
暗い夕闇が迫るだろう

でも、あの雨雲の隙間に
僕はちょっとばかり期待してしまう
夕陽が顔を覗かせる一瞬を

第二部　希望　『未来』

僕は常に君に問いかけてきた
君のレンズを通して見た未来が
僕の未来と違っているのなら
僕達はいったい何処を彷徨ってるの

空高く見上げると細く白くたなびく雲
あれはきっと宇宙船が飛んだ跡だと
僕はその突端を目で必死に追う

明日への宇宙船に乗り込もう
迷っている暇などないはず
希望という荷物だけを背負って
空高く、空高く舞い上がるのさ

僕達には未来など見える訳がない
何故なら未来はこれから創るものだから
君と僕、二人の未来はまだどこにもない
あの空の彼方から僕らの未来づくりが始まる

迷い、悩み、戸惑い、立ち止まり、

それでも僕は君と歩みたい

第二部　希望　『親の背中』

選ばれた刀で儚く夢を削り
自分は一体何者かと思い惑う
誰もが人生という舞台で役を演じ
僕は出番が来てもぎこちなく踊る
そんな日常の中、心の片隅で
当たり前のことにある日ふと気付く

年老いた両親と自分自身
衰えることなど見知らず
今日まで懸命に生きてきた
自分を欺けない、偽れない
君が僕の後ろにいてくれるから
前だけを見つめてきたんだ

太陽を地球が周るように
四季が毎年繰り返すように
僕達は知り得ぬ力で生かされてる
いつも同じような顔をして朝を迎え
日々の由無し事を乗り越え
長い夜が訪れるのを待ち侘びる

失うことなど怖くはなかった
毎日は使い捨てだと思ってた
過去を捨て去って気付いた
未来は過去を創るためにある
どんなに抗っても誰にも平等に老いはくる
離れずに受け止めて、怖がらず受け入れて
僕の過去が君の今をつくった
君の過去は僕の今をつくった

今を生きる、それは不毛ではなくて
未来を創る大切な営みなんだと
砂を噛み締めるような人生だけど
誰の人生にも邪魔など入らないから
目の前の出来事を迷わず生きるだけさ
年老いた親の小さな背が語りかける

僕の人生は一度きり、先は長くない
どんな未来を創るために生きるのか

第二部　希望　『時間の奴隷』

いつの間に眠りに落ちた枕元で
幾多の夜の闇を乗り越えて
清々しい朝の息吹きを感じる
絶え間なく続く生の象徴
鮮やか過ぎて、美し過ぎて
総てを粉々に破壊したくなる

この世では誰もが時間の奴隷
気付く余裕すら与えられず
瞬間瞬間に囚われ
自分を何処かへ置き去りにする
ブロックしても押し寄せる
高まる荒波のように、強く

誰も自分のリズムを刻まない
時間に操られ、自分を失う
誰か僕のゾーンで勝負しろ
胸元を抉るような渾身のボールで
打ち返すのは容易だから
躊躇せず放り込むがいい

生きてきた時間を振り返ろう
赦し合った日々も闘い争った日々も
総てが永遠の記憶だから
生きよう、自分自身のペースで
乱されることなく、強い意志で
僕は今を、この先の未来を総て
信じないまま過去のものにする

第二部　希望　『明日への扉』

街を走る、行く宛もなくひたすら
途切れることのない人波を交わし
明日への扉はどこ、一心に探してる
憂鬱な毎日が果てしなく続く
今日が何処へ行くのか尋ねても
全部嘘さ、誰も嘘さ、答えなどない

言われのない罪を身に纏い
帰らない痛みは強まるばかり
飛べない翼を抱えて途方に暮れる
誰にも解らない悩みだから

心を開き、目の前に晒して
人は裏腹に幸せな顔を造る
道が激しくうねって隆起していても
ゴールが道の先にあるかさえ
誰かが前に進まねば解り得ない

太陽が沈んだ、夕闇が迫る
暗い足元を見つめ、目の前の未来が消え去る
選択肢を失い、絶望感に包まれる
僕らは戸惑いながら、蹴躓きながら
見えない明日への扉を手探りで拓く

第二部　希望　『永遠の子供』

責任と自覚を持って生きろ
立派な大人達はそう言って聞かせる
僕らが過ごしてきた幾年月は
そんなに人を立派に育てるのだろうか
もし許されるのなら永遠の子供でいたい
甘えでも憧れでも何でもなく
僕は常に僕らしくありたい

時だけが目紛しい速さで過ぎ去り
僕らは傍目にも子供には見えない年齢
周囲はつまらない大人だらけになった
けれど僕はただ一人でも僕らしくあろう
何かを綴らんと意気込んで筆を執り
この世の不条理や我が身の不自由を
虚空に向かって叫び続けたい

誰かに自分を認められる訳でなく
僕が僕であり続けるために大切なこと
しっかりと全身全霊で見極めていたい
いつまでも喪わない無垢な子供の心で

第二部　希望　『夢よ永遠に』

見果てぬ夢を追いかけて
たとえどんなに打ちのめされても
いつも君は笑顔で待っててくれた
温もりも感じられぬあの夜
だからどこかへ彷徨ったとして
いつも君は帰りを待っててくれた

真実と闘おうとする強靭なハートと
現実から逃げ出そうとする臆病な気持ち
互いにせめぎ合い、窮屈になる心
僕はまだ終わらない、走り続ける
前だけを見つめ、この世界を信じて

君は大好きな人、いつも大好きな人
だからこそ、僕は君を片時も忘れ得ず
夢の果てまで追い求めるのだろう
辿り着くことのないジャーニー
何処へ向かうのか、誰と旅立つのか
お互いを信じ、認め、赦し合い
この世界に二人の夢をシェアしよう

すべてがいつも永遠だったから
これからも二人が永遠であるように
誰にも解らない未来に翻弄されず
果てしない明日を信じて、祈り捧げよう

第三部　受容　『恋愛感情』

愛してるの一言が
とても言えなかったあの頃
僕らは青春の真ん中で
いつも互いにすれ違っていた

街中で見かけた君
声かけられなかったあの時
僕らはスクランブル交差点で
行き交う人波に紛れた

決して近寄れない距離じゃない
ほんのすぐそばにいるよ
思えば歯痒くて、会いたくて
でも自分からはどうしようもない

時が過ぎ、いつか僕は大人になる
出会ったこの今は何より愛おしい瞬間
恋愛対象じゃなければいいのに
夢を見た、いつか君は大人になる
それぞれの時は何より大切な瞬間
恋人同士になればいいのに

第三部　受容　『抗わず受け容れよ』

音もない世界で闇に迷う
遠く聞こえる海鳴りの音
波間に煌めく光の筋が
鮮やかに艶やかに妖しく
漆黒の夜空を映し返す

いつか帰れればよかった
少年の頃過ごした水際の大地
記憶の果てにある自分を取り戻すため
決して忘れない、忘れられない
この世に生を受けたそのままの僕自身

誰かの自由が僕の束縛になり
すべてが絶望に変わったのはいつ
真っ直ぐ迷わず受け入れてきたよね
辛く哀しい末路が待っていること
僕だって薄々気付いてはいたんだ

最初から最後まで変わることなく
自分自身でいようと何かに抗うより
変わりゆく自分を信じて受け止めて
今の僕をありのままに見つめて
飾ることのない、疑いのない僕の心を

第三部　受容　『掌の宇宙』

海辺で白い貝殻を集めるように
僕は太陽の破片を空に求めた
限りない青へ、両手を伸ばして
きめ細かな光の粒子が降り注ぐ
忘れ得ぬ記憶、心に留めて
このまま正しく時を止めて
いつまでも今を記憶しよう

限りない温もりと凍てつく寒さが
何度も何度も僕の人生を廻り
心の隙間をすっかり埋め尽くしても
すべては終わりを告げ世界が幕を閉じる
時代は移り変わり新たな世界が訪れる
この世界の行方なんて誰も知らない
見えざる敵と闘い続け、疲れ果てた日々

いつの日か僕は目を細め大空に振り返る
この世界が始まったあの日の光を
移ろいながらここまで歩んだ日々
懐かしみながらも僕は唇を何度も噛み締め
掌の中にある星の欠片をすべて放り投げた

第三部　受容　『不器用な愛』

何に従い、何に騙されて
何処を転がっていくのか
季節は移り変わっても
僕自身は決して変わらない
生命より遥かに尊いもの
そんなものがあるだなんて
価値観は受け入れられないよ
君が大切にする現在過去未来
僕は俄かには認められない

駆けてく君の背を追わない僕
振り返らない君は希望に満ち溢れてるのか
今できることなら理屈じゃなくて
壊れるほど強く抱きしめたい
君と心から通じ合いたいよ
何が僕の行く手を遮っているのか
僕達の心のディスタンスは広がるばかり
君は何処までも僕から遠ざかる
限りなく一人きりになった夜
僕はあり得ない未来を夢見た
微笑みながら駆け寄ってくる君の姿

第三部　受容　『純心』

夏時雨の午後
僕のまちにそよぐ柔らかな風
君は今誰とどこにいるの
表情のない大人びた素振りは嫌い
誰かの耳触りのいい言葉に
踊らされていないかい
君を欺く悪ふざけも悪だくみも
僕は決して許しはしない

真実はいつもこの掌の中にある
誰にも踏みにじれない大切が今ここに
初心な君の心を救ってほしい
ナイーブな僕を包んでほしい
この優しさも真実も後ろめたさも
何もかも永遠に平穏であれ

君の声が聞けなかったからブルー
お互いそんな子供じゃないけど
僕達はいつの日か永遠を刻むのか
電話やメールでは伝えない
直接語りかける愛の言葉
まっすぐに君の心に届け

心から君に会いたくて
でも実際に会うのが怖くて
真実を遠くに置き去りにしたまま
すべてを振り出しに戻しかけたあの頃
風になって君のもとに届け
数え切れない後悔と信念を
今こそ君に知ってほしい
僕達は過去に遡り違う道を歩む
お互いに立ち止まった時と場所を
胸に深く刻み込みながら

第三部　受容　『何者でもない』

温かな手を胸にあて
両目を優しく閉じて
心の内奥にある芯を見遣る

ひっそりと咲いたシクラメン
遮光した日陰に目立たぬ姿で
夏を越えて懸命に生命を繋ぐ
僕はすべての成り行きを見守り
明日の行方を何処かに探してる

僕など何者でもない
捻れ切ったその存在が
今此処にあることが奇跡
時に抗いながらも
時に弄ばれても
いつか辿り着くのさ
人生の終着地に

目の前に踏み出した一歩
僅かな前進が微笑ましい
僕は立ち止まりながらも
たとえ蹴つまずきながらも
決して諦めはしない
人生のラストスパートを

第三部　受容　『勇者の旅路』

高鳴る鼓動を抑えながら
押し寄せる人波をかき分け
時計の秒針の進みに苛立ち
何もかも打ち捨て僕は家路を急ぐ
今日は明日より、未来より大切な一日

貴方は夢を追い、僕らの元を去った
モザイク状に散らばった僕らの夢
いつかは一塊になると信じ
貴方の帰りをひたすら待ち続けた
今日までの長い道程を忘れやしない

今日のこの瞬間を目に焼き付けよう
この世界に生まれてきた幸せ
我が事のように心から感動する
そんな瞬間の為に貴方も僕らも
辛く厳しい決断を下してきた

偉大な勇者が最後の闘いに挑む
僕らはその生き様をこの目で見届ける
数百段の石段を登って見える世界
僕らにも同じ風景が垣間見えるかな
信じよう、勇者の最高の笑顔を

さあ勇者よ、その足で辿り着け
遥かなる旅路の果てにあるゴールへ
そして高らかに勝ち誇れ、自らの偉業を
僕らはさながら伝説の生き証人
貴方と一緒に歩んだ日々を決して忘れない

第三部　受容　『時空を超えて』

祈りにも似た感情など湧かず何故か物哀しい
あの神々は僕の知る勇者じゃない

天高く昇れと皆で祈った懐かしきあの頃
貴方は期待と裏腹に地を這っていた
長年僕らの心を巣食った貴方らしさ
それが頼りない貴方の魅力でもあった

今大空を誇らしく舞う貴方は全くの別物
戸惑っている僕らは一体何を望んでいる
力強く躍動する貴方の姿が僕らの幸せと
疑うこともなく声援を送ったあの頃

何か違う、これが僕らの愛した神々か
この違和感を僕らは払拭しなければ
今まで僕らを魅了してきた戦士達
彼らに別れを告げ、眼前の神々を見遣る

僕らは何ひとつ変わらないつもりで
気付けば少年の瞳をした大人になってた
年月はきっと永遠に僕らを弄ぶ
僕らは移り変わる時代に抗いながら
今ここにある現実を確かに受け止める

第三部　受容　『刻一刻』

新しい星が天空の彼方に見えるよ
瞬いたその盲目の瞬間に
明滅して消え去ってしまうがいい

誰かを赦すなんて決してできなかった
何より自分自身を赦せなかった
誰ひとり愛することもなく
世を欺きながら僕は生きている
己を偽りながら僕は生き永らえてる

本当の自分に会ってみたくて
僕は諦め悪く何度もドアをノックする
電話かけてもメール出しても
この言葉は何処にも届きやしない

僕らが生きるこの世界にたった一人の自分
こんな価値のない僕ならば
せめてもう一人生まれてくればよかったのに

誰に謝れば、誰の赦しを乞えば
僕は僕のままでいていいのかな
この世界にただ一人存在していいの

僕の心と身体はボロボロになりながら
時を刻み、終わりに近付いてる
果たして僕は最後には出会うこともない
あるがままの自分を受容するのかい

第三部　受容　『等身大の自分』

通い慣れたこの場所もきっと今日が最後
友と何度も集った夢溢れる世界
始めの頃はこんな日を迎えるなんて
思いを馳せる余裕もなく
自分の成長にただ焦りを感じてた

等身大の僕でいればいいのだと
気付かせてくれたのは君の言葉
ありのまま、あるがままの姿
恥ずかしげもなくさらけ出してくれた君
僕は永遠に失いたくないと願い
皆の君を我が物にしようとした
お互いの別れ道になるとも気付かず
限りなく子供じみてた僕の振る舞い

お互い様と返す君は誰より大人だった
僕だけの君を求めることは
君が大切にするすべてを失うこと
僕は一人きりで生きている訳じゃないけど
君を失った世界は限りなく空虚
色褪せた非現実が現実を覆い尽くす

僕は覚束ない足取りでこの道を辿る
何かを失うことも人生において大事なこと
今の僕が僕であるのはただの強がり
そんな僕を皆で笑うがいい
一度は信じた自分が最悪だったとしても
僕は僕、今もあるがままに生きる
この錆び付いた世界を受け入れて
身体も心も遠く通わないとしても

第四部　新風　『セピア色の心』

遥か彼方まで澄み渡る青い大空に
僕達のピュアな気持ちは溶け込んでく
青年の心はどこまでも正直だ
失うものなどない、考えなくていい
それに対してどうだ、僕達は考えてしまう
遥かなる未来も、足元の現実も
何もしなければ消え去ってしまう

年を重ねゆく僕達は罪深く
人は知らず知らずのうちに
犯した罪の責任を背負う

世界を動かそうなどと大胆なことは考えず
我々がこの世に生を保つことを許されるため
人は迷いの中に生き、それでも選択を迫られる

嗚呼、僕は間違っていますか
正しいほうを向いていますか
誰か僕の声を聞いてくれますか
僕はひとりぼっちでも大丈夫ですか
僕は今日も生きてていいですか

今日この決断がすべてを決める訳でなく
毎日を生きるその一瞬一瞬が人生の選択
人生という決断の連続を僕達は生きている
新しい風がセピア色の心に吹いてきた
僕は何の為に、誰の為に生きようか
瑣末な決断だと笑い飛ばしたい
僕は不安気な面持ちで青空を見上げる

第四部　新風　『未来航路』

音もなく雨降りしきる週末
何をして過ごそうか思案中
この狭い家に家族が勢揃い
たまにはそんな日もよいかと
僕は自分の居場所を探す

気が付けば僕は大人になり
所帯を構え、子宝にも恵まれた
幸せとは実感するものではなく
そこはかとなく感じるもの

ふと目を移せば妻が娘と会話
それを当たり前に思う今日この頃
10年前には想像もし得ない景色
僕の周囲はどれほど変わったのだろう

子供の頃、僕の両親も同じように
家庭が幸せの象徴だったのかな
毎日朝昼夕の食事と他愛ない会話
我先に奪い合う朝の洗面所
忘れることのない家族旅行
理由のない両親や兄弟への反発
すべてが意味ある出来事だった

今僕が子供の頃と同じように
家族という血のつながりが
確かに届けてくれる、幸せを
僕はお互いを支え合いながら
人生という未来航路を漕ぎ続ける

第四部　新風　『時代の風』

ゆらゆらと僕の魂が揺れる
まるで夢でも見ているかの如く
いつの日か抱いた不変の感情
湧き上がれ、誰よりも熱く
舞い上がれ、何処までも高く
あの頃の僕らは風切って歩いた
まだ幼き者が我が物顔で生きてた

決して短くない苦しい日々があった
許し合い、人は過去を乗り越え
称え合い、誰もが自分を築き上げる
今この心にとめどなく溢れる思い
遥かなる壮大な大地を越え
地平線の彼方、星空へ届け

悔し涙に濡れた日々など
もう迷わない、決して振り返らない
僕は前へ、前へと進むと決めた
南風が吹いて訪れた新たな時代
僕らは過去の栄光を回帰しながら
この最高の瞬間が永遠に続けと祈る

第四部　新風　『時に抗う』

青空というキャンパスを
カッターでギザギザに切り刻んで
裏地にある灰色の曇り空
気が付けば降りしきる雨
僕等はずぶ濡れになりながら
明日を畏れ、今日を慈しむ

いつの日にかまたあんな風に
凍えるときが来るとしても
真夏日の今日は僕等を守り
凍てつくこともなく
俗世間の寒さなんて無縁

僕等はこの現代という宇宙を
どんな風に泳げばいいの
数え切れないシンパシーは
僕には不要物でしかない
ひとりきりがいい

時が雨水のように途切れず流れる
臆病者の僕は朝が来るのが怖い
夜闇の中で秒針が時を刻む
このままいつまでも永遠に
今日が今日のままであればいいのに

第四部　新風　『世界の一欠片』

あまりにも高すぎる摩天楼
果てしなく遠すぎる地平線
僕らは今この広い世界の
何処を彷徨ってるんだ

僕らが乗り込んだ船の羅針盤は
向かうべき方角を示しやしない
何を拠り所に、何を信じて
此処にいる、何処へ向かう
何の為に生きる

嗚呼、この広い世の中には
こんなにも数多くの子羊たちが迷える
神は優しい笑顔を振り向け
傷つけ見放してしまうのか
僕らはいつの日か信心を捨て
怒りを覚え、悲しみに暮れる

見果てぬ夢の架け橋
いつかなりたかった自分
僕らは迷わず真っ直ぐ
そこへ向かっているのか
聖地の神々は答えを発することなどない
誰か教えてくれよと僕らは途方に暮れる

第四部　新風　『青の季節』

眼前に広がる一面のブルー
人混み溢れざわめくビーチ
光と同化し透き通るスカイ
誰もが待ちわびたこの季節

開け放たれた心から
募る思いを届けたくて
人気のない外に出てみた
大自然を讃え、吼える僕

肌をジリジリ焼く陽射しは
臆病な僕を次のステージへ
迷わず、躊躇わず運び届ける
そこに僕が必要な者として

僕は勇者なんかじゃない
共に戦っているだけさ
希望がこの世界に続く限り
未来に誇りを保てる限り

サンセットタイム
あと数時間で陽は沈む
サマーセット、夏の名残
季節にも必ず終りが訪れる
新たな始まりを引き連れて

第四部　新風　『愛しくて、恋しくて』

貴方を愛すれば、恋すれば
心の距離は縮まるのだろうか

初めて貴方が僕の前に現れたとき
僕の心は卑屈で、途端に拒絶反応
だからこの一年も今までどおり
同じ暗い日々が続くと信じてた

貴方の笑顔が僕に向けられたとき
これ以上の幸せは訪れないと思った
そして貴方と同じ時間を、空間を
一瞬でも多く共にしたい
心からそう思った

貴方がいたから強くなれた
貴方のために力を振り絞った
夢の架け橋を渡ることが
できたのは貴方のおかげ

愛してるなんて大人じゃなくて
好きだなんて子供じみてなく
あれがもしかしたら恋心
僕が貴方に抱いた感情は永遠
もう二度と訪れることはない

第四部　新風　『果てなき思い』

星ひとつ見えぬ夜空に
彼の地で見上げた満月を思う
誰もひとりぼっちだった
僕だって君と出会うまでは

信じられない惨劇に
君が涙を流すのなら
僕がいつまでも側に寄り添おう
あの時君が僕を支えてくれたように

我々人類が幾多の試練を乗り越え
ようやく掴み取った自由と平和
今もしっかり手を離すことなく
強く、強く握り締めよう

思い出してみてごらん
遥かなる僕等の少年時代
怖いもの知らずのふりして
その実弱音ばかり吐いてた

今僕等の熱き魂は
誰にも邪魔されることなく
それぞれの信じる道を
果てなく歩んでいるはず

涙が枯れ切ってしまうまで
思い切り流してしまおう
僕等の輝ける未来を
もう一度共に描き出すために

第四部　新風　『人間たるもの』

僕の心身は
時間と空間の歪みに耐え
今日まであるべき姿を保ってきた
しかし、時の経過とともに
心は引き裂かれ
身体はその中心を失い
いつしか僕はバラバラになった

交差点の信号待ちで立ち止まったとき
僕は何を見つめていればよいのだろう
満員電車の人いきれの中で
僕は何に耳を澄ませればよいのだろう
充填密度いっぱいのエレベーターに乗り
僕は何に思いを馳せればよいのだろう

悩みながらも歩き続け
一瞬たりとも立ち止まることなく
ただ無思考に呼吸し、思索し、活動し
単機能な機械がごとく
毎日を黙々と過ごしてきた

そんな生活に疑問を呈した今日
果たして僕は人間であった、人間となった
ただひとつの拠り所であった社会性を失った今
ようやく自分らしく生きる自分を発見した

窓外では人間活動の音が
そこかしこから聞こえてくる
誰もが自分の何たるかという問いに答えず
偽りの自分を演じている
僕は今日から人間として生きる
この生命が続く間に気付いてよかった

第四部　新風　『勇者の航路』

今にも泣き出しそうな雨雲が
僕の足取りを早めてく
決していいことばかりじゃない
つらいことの方が多かった
たとえ何かを裏切ろうと
僕は自分自身を守り抜く

数え切れない冷たい雨粒が
僕の足先まで濡らそうと
何かにこだわり生きるだけで
不思議な力が湧くと信じてた
たとえ四半世紀が経っても
僕達の思いはひとつだけ

夢を見てたような気がする
僕達がまだ幼き頃から
強く優しき者に憧れ
大海をただひたすら目指した

今あの頃の僕らと
同じ輝いた目をした少年達が
明日を夢見て、未来を信じて
遥かなる航路を勇ましく進む

巻末　『四行詩』

ふとした瞬間に

我に返る

時は移ろう

我が想いは永遠なり

傾聴

http://p.booklog.jp/book/108499

著者：小杉 匠
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/cosgy/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/108499

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/108499

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ